ヲ格句を伴う移動動詞句について
－アスペクト的観点からの動詞句分類における位置づけ－

川　野　靖　子

キーワード：ヲ格句、移動、結果の局面、限界点、アスペクト

要旨

本稿では、<結果の局面の有無>、<限界点の有無>という二つの基準に基づいて［起点］、［経路］、［通過点］ヲ格句を伴う移動動詞句の意味特徴を分析し、アスペクト的観点からの動詞句分類における、これらの動詞句の位置づけについて論じる。

本稿ではまず、<結果の局面の有無>による動詞（句）分類と<限界点の有無>による動詞（句）分類が明確に区別されるべきものであることを述べる。その上でヲ格句を伴う移動動詞句のアスペクトを分析し、［経路］ヲ格句を伴う動詞句は「Atelic な動作動詞句（－結果の局面、－限界点）」に、また［通過点］ヲ格句や［起点］ヲ格句を伴う動詞句は「Telic な動作動詞句（－結果の局面、＋限界点）」に分類されるという結論を提示する。

1. 研究の目的

本稿では（1）～（3）のような［起点］、［経路］、［通過点］の意味役割を担うヲ格句[1]を伴った移動動詞句[2]について、それらの特徴を動詞句のアスペクトの観点から分析する。

（1）教室を出る（起点）
（2）道を走る　（経路）
（3）山を越える（通過点）

移動動詞句の意味特徴について論じた先行研究には、「移動過程のどの段階に重点をおいた表現であるか（出発段階、経過段階、到達段階、等）」によって移動動詞句を下位分類したもの（宮島 1972、成田 1979、寺村 1982、岡田 1998 等）や、移動動詞句どうしの意味用法の異同について述べたもの（森田 1980、益岡・田窪 1987、丹保 1997 等）などがある。これらは移動動詞句の範囲内でその下位類について論じたものであり、動詞句全体の分類の中にそれぞれの移動動詞句を位置づけたものではない。本稿では<結果の局面の有無>、<限界点の有無>という二つのアスペクト的基準に基づいてヲ格句を伴う

移動動詞句を分析し、アスペクト的観点からの動詞句分類において、これらの移動動詞句がどのように位置づけられるのかを明らかにする。ここで本稿が特に問題とするのは「教室を出る」のような［起点］ヲ格句を伴う動詞句である。従来、「出る」という動詞は＜結果の局面の有無＞に基づく動詞レベルの分類において変化動詞に分類されるのが一般的である。これに対し本稿では、「出る」を［起点］ヲ格句を伴った形の動詞句レベルで分析し、「～ヲ出る」は結果の局面をもたない動詞句、すなわち動作動詞句に分類されること、ただし＜限界点の有無＞という観点からは、変化動詞句と同様、Telic な動詞句に分類されることを指摘する。

2. ＜結果の局面の有無＞と＜限界点の有無＞

具体的な議論に入る前に、＜結果の局面の有無＞と＜限界点の有無＞という動詞（句）の分類基準について、それぞれ説明を加える。

まず＜結果の局面の有無＞という基準について述べる。「結果の局面」とは、動詞（句）の表す出来事の過程を構成する局面の一つであり、＜結果の局面の有無＞はその動詞(句)が変化動詞（句）であるか動作動詞（句）であるかを分ける基準となる。高橋 1985 は動作動詞と変化動詞の局面の構成について、動作動詞の表す出来事過程は「運動の局面」から成り、変化動詞の表す出来事過程は「運動の局面」と「結果（静止）の局面」から成ると述べている[3]。

本稿における＜結果の局面の有無＞という分類基準は、先行研究のこうした議論を踏まえたものである。移動動詞句に関して言えば、「運動の局面」の具体的内容は「移動」であり、「結果の局面」の具体的内容は「存在」であると考えられる。たとえば「庭に出る」という移動動詞句の表す出来事過程は、「ゆっくり庭に出る」に見られるような主体の移動を表す局面と、「一時間庭に出る」のような移動完了後の主体の存在を表す局面から成る。一方、「庭を歩く」のような移動動詞句は主体の移動を表す局面しか持っていない。＜結果の局面の有無＞により、移動動詞句は次のような二つのグループに分類できる。

(4) ＜結果の局面の有無＞による移動動詞句の分類
・変化動詞句＝運動（移動）の局面 ＋ 結果（存在）の局面　　例）庭に出る
・動作動詞句＝運動（移動）の局面　　例）庭を歩く

次に＜限界点の有無＞という分類基準について述べる。限界点、あるいは限界性といった概念もすでに先行研究において用いられており、「動詞句の限界性とは、動詞句によって表される事態（event）に限界点が存在するかどうか、すなわち、事態の終了時点（terminative point）の有無に関することを言うものである（北原 1999)」のような規定がみられる。本稿の言う「限界点」もこれらの先行研究で論じられているものと同様のものである。移動動詞句はすべて「運動（移動）の局面」を持つが、その運動（移動）

が限界点を有する運動（移動）であるかどうかによって、やはり二つのグループに分類される。たとえば「庭に出る」は主体が「庭」という場所に移行した時点で完成したと言える運動を表すから、Telic な動詞句（限界点の存在する動詞句）である。一方、「庭を歩く」はそうした運動完成の基準となるような時点を持たない運動を表すから、Atelic な動詞句（限界点の存在しない動詞句）である。

(5) ＜限界点の有無＞による移動動詞句の分類
・Telic な動詞句＝必然的な終了点のある運動（移動）を表す　例）庭に出る
・Atelic な動詞句＝必然的な終了点のない運動（移動）を表す　例）庭を歩く

最後に、本稿が＜結果の局面の有無＞、＜限界点の有無＞という二つの基準の対応関係をどのように捉えるかという点について述べておきたい。(4)、(5) を見ると、＜結果の局面の有無＞に基づく動詞句分類と＜限界点の有無＞に基づく動詞句分類は、一見、「変化動詞句＝ Telic な動詞句」、「動作動詞句＝ Atelic な動詞句」という、完全な対応関係を為しているように見える。しかし本稿が以降の議論で指摘するように、実際には Telic な動詞句が常に変化動詞句であるわけではなく、動作動詞句の中にも限界点をもつ動詞句は存在する（～ヲ通り過ぎる、～ヲ越える、等）。このことを踏まえ本稿は、＜結果の局面の有無＞と＜限界点の有無＞により動詞句は次のような三つのタイプに分類されると考える[4]。

(6)

	結果の局面の有無	限界点の有無
タイプ 1	― (動作動詞句)	― (Atelic な動詞句)
タイプ 2	― (動作動詞句)	＋ (Telic な動詞句)
タイプ 3	＋ (変化動詞句)	＋ (Telic な動詞句)

＜結果の局面の有無＞、あるいは＜限界点の有無＞に関する具体的なテスト等については次節以降で詳しく述べるが、本稿は＜結果の局面の有無＞、＜限界点の有無＞という二種類の基準に基づく複合的な動詞句分類を想定し、その中にヲ格句を伴う移動動詞句を位置づけようとするものであることを確認されたい。

3. ＜結果の局面の有無＞に基づく分析

本節ではヲ格句を伴う動詞句の＜結果の局面の有無＞を確認し、これらの動詞句がそ

れぞれ動作動詞句と変化動詞句のどちらに分類されるのかを明らかにする。

＜結果の局面の有無＞を調べるテストには、持続期間を表す副詞を用いたテストがある（高橋 1985、森山 1988、影山 1996）。結果の局面を有する変化動詞句においては、「一時間」のような副詞を共起させて結果の局面をとり出すことが可能である[5]。

(7) 時計が一時間止まる　　（止まっている状態の持続が一時間）

これに対し、結果の局面を持たない動詞句、すなわち動作動詞句では、「一時間」のような副詞が結果状態の持続期間を表すことはない。(8) のように「一時間」が共起しないか、共起したとしても (9) のように結果状態の持続期間ではなく運動の持続する期間を表す。

(8) *太郎が事件を一時間目撃する
(9) 太郎が一時間泣く　　（運動の持続が一時間）

また、＜結果の局面の有無＞は、テイル形の解釈に基づくテストによっても調べることができる。変化動詞句のテイル形は動詞の表す出来事過程のうちの「結果の局面」をとり出して、「結果状態が現在持続中である」という解釈（「結果継続」の解釈）を実現する。たとえば次の (10) は「時計の停止状態が現在持続中である」という解釈を持つ。

(10) 時計が止まっている

藤井 1966、矢澤 1985、高橋 1985、杉本 1988、工藤 1989 等、多くの先行研究が指摘しているように、「結果継続」の解釈はいわゆる「経験」の解釈（矢澤 1985 の「出来事の存在」、工藤 1989 の「動作パーフェクト」）とは明確に区別されるべきである。(10) には先に述べた「時計の停止状態が現在持続中である」という「結果継続」の解釈の他に、「時計が止まるという出来事が現在以前にすでに完了している」ということを表す「経験」の解釈がある。「経験」は「結果継続」とは異なり、出来事がすでに完了したことを表すだけで、その結果状態が現在持続中であるということは表さない。両者のこうした違いは次の二つの現象からはっきりと確認される。第一に、「結果継続」の解釈が「結果の局面」を有する動詞句、すなわち変化動詞句からのみ生じ得るのに対し、「経験」の解釈はあらゆる動詞句から生じ得る。次の二例は動作動詞句がテイル形で「経験」の解釈を実現している例である。

(11) 太郎が事件を目撃している　（経験）
(12) 太郎が二時間前に泣いている　（経験）

第二に、「結果継続」を表す文が「さっきからずっと」のような、状態や運動が現時点において持続中であることを示す語句と共起できるのに対し、出来事の完了のみを表す「経験」はこのような語句とは共起できない。

(13) 時計がさっきからずっと止まっている (結果継続)
(14) *太郎がさっきからずっとその事件を目撃している (経験)

以上のことから、「結果継続」と「経験」が明確に区別されるべき解釈であることは明らかである。本稿の以下の議論でテイル形の解釈に基づくテストを用いる際には、「さっきからずっと」のような語句を伴わせた上でその文が「結果継続」を表すかどうかを判断することとする。

以下では、上で述べた二つのテスト(持続期間を表す副詞との共起、テイル形の解釈)を用いながら、ヲ格句を伴う動詞句の<結果の局面の有無>を確認する。

3.1. [経路] ヲ格句を伴う動詞句

[経路] ヲ格句を伴う動詞句には、次のようなものがある。

(15) 太郎が公園を歩く
(16) 車が道路を走る
(17) 魚が池を泳ぐ

(15) は主体「太郎」が「公園」という領域内を移動することを表すだけで、移動完了後に「太郎」がどこに存在することになるかといったことは表さない。したがって結果の局面を持たない動作動詞句であると考えられる。(16)、(17) も同様である。

次に、やはり [経路] ヲ格句を伴う、次のような動詞句の例を考えてみたい。

(18) 太郎が坂を登る
(19) 太郎が階段を上がる

「登る」「上がる」などの動詞は上のように [経路] ヲ格句と共起する一方で、[着点] ニ格句とも共起する。そして、それぞれの場合で、表される意味内容が変わってくる。

(20) a. 太郎が坂を登る
b. 太郎が屋根に登る
(21) a. 太郎が階段を上がる
b. 太郎が二階に上がる

上の例はいずれも、a文が［経路］ヲ格句を伴った例、b文が［着点］ニ格句を伴った例である。まず（20b）の「太郎が屋根に登る」であるが、ここでは、「太郎」が運動（移動）の結果として「屋根」に存在するようになるという内容が表されている。このことから（20b）は変化動詞句であると判断される。これに対し（20a）の「太郎が坂を登る」は「太郎」が「坂」という領域内を運動（移動）することを表すだけで、運動後の「太郎」の状態は問題にしない。したがって動作動詞句であると判断される。（21）のa文、b文についてもそれぞれ同様のことが言える。このように「登る」「上がる」などの動詞は動作動詞句を構成することも、変化動詞句を構成することも可能であるが、［経路］ヲ格句を伴う場合には、先の「公園を歩く」などと同様、動作動詞句を構成するといえる。

［経路］ヲ格句を伴う動詞句が結果の局面を持たない動作動詞句であることは、テストによって客観的に確認することができる。次に示すように、［経路］ヲ格句を伴う動詞句においては、「一時間」によって結果の局面を取り出すことができない。

（22）＃太郎が一時間公園を歩く　（「運動の持続が一時間」の意味でのみ解釈可能）
（23）＃太郎が一時間坂を登る　（　〃　）
cf. 太郎が一時間屋根に登る　（屋根にいる時間が一時間）

また、これらの動詞句のテイル形は「結果継続」の解釈を実現しない。

（24）＃太郎がさっきからずっと公園を歩いている
（「運動が進行中」の意味でのみ解釈可能）
（25）＃太郎がさっきからずっと坂を登っている　（　〃　）
cf. 太郎がさっきからずっと屋根に登っている　（結果継続）

以上のことから、［経路］ヲ格句を伴う動詞句については以下の点が確認される。

（26）［経路］ヲ格句を伴う動詞句は、結果の局面を持たない動詞句（＝動作動詞句）である。

3.2. ［通過点］ヲ格句を伴う動詞句

［通過点］ヲ格句を伴う動詞句には、次のようなものがある。

（27）電車が駅を通り過ぎる
（28）登山客が峠を越える
（29）走者が障害物を飛び越える

（27）は「電車が駅を越えて移動する」という運動の局面を表すだけで、運動完了後の

「電車」の状態は表さない。(28)、(29) についても同様である。したがって［通過点］ヲ格句を伴う動詞句も［経路］ヲ格句を伴う動詞句と同様、動作動詞句に分類されるといえる。

以上のことは、テストによっても確認される。

(30) *電車が一時間駅を通り過ぎる
(31) *登山客が一時間峠を越える
(32) *走者が二秒間障害物を飛び越える

このように、［通過点］ヲ格句を伴う動詞句においては「一時間」のような副詞によって結果の局面をとり出すことができない。また、これらの動詞句は次のようにテイル形で「結果継続」の解釈を実現することもできない。

(33) *電車がさっきからずっと駅を通り過ぎている
(34) *登山客がさっきからずっと峠を越えている
(35) *走者がさっきからずっと障害物を飛び越えている

以上のことから次のことが確認される。

(36) ［通過点］ヲ格句を伴う動詞句は、結果の局面を持たない動詞句（＝動作動詞句）である。

3.3. ［起点］ヲ格句を伴う動詞句

［起点］ヲ格句を伴う動詞句には、次のようなものがある。

(37) 車がスーパーの駐車場を出る
(38) 太郎が友達の家を出る
(39) 戦闘機が敵国を脱出する
(40) 太郎が迷路を抜け出す

「出る」などの動詞は、変化動詞であるとされるのが一般的である。しかし、［起点］ヲ格句を伴った動詞句レベルではどうであろうか。

「～ヲ出る」等の［起点］ヲ格句を伴う動詞句について、益岡・田窪 1987 や丹保 1997 は、これらの動詞句が表すのはある場所から別の場所への移動（内から外への越境移動）ではなく、ある地点から離れることであると指摘している。先行研究の指摘する、「～ヲ出る」のこうした特質は、次のような例によっても確かめられる。

(41) a. 車が駐車場を出る
　　b. *車が駐車場の中を出る
(42) a. 囚人が刑務所を脱出する
　　b. *囚人が刑務所の中を脱出する
(43) a. 太郎が建物を抜け出す
　　b. *太郎が建物の中を抜け出す

(41a) は、(41b) のような「〜の中」という語を伴った表現に言い換えることができない。これは、(41a) の表す内容が「車が駐車場内という場所から駐車場外という場所に越境移動する」というものではないためと考えられる。(42)、(43) についても同様のことが言える。

また、次の例を見てほしい。

(44) ?? 体が冷えたので花子は海を出た
(45) 一行を乗せたバスは正午に海を出た

「〜ヲ出る」は、(44) のような、「海の中にいた花子が海の外（浜辺など）に存在するようになる」といった、ある場所から別の場所への移行を表す文脈で用いられると、不自然になる。一方 (45) のような、場所の移行ではなく、ある地点からの移動の開始を表す文脈では、「〜ヲ出る」が自然である。

以上のように、「〜ヲ出る」等の動詞句は、ある場所から別の場所への移行を表すのではなく、ある地点から離れることを表す。ここで、変化動詞の表す出来事過程について考えてみると、変化動詞句とは「主体が A という場所から not A という場所に移行する」という運動の局面と、「主体が not A という場所に存在する」という結果の局面を持つ動詞句である。これに対し、「〜ヲ出る」は移動の開始を表すだけで、別の場所への移行を表さないから、当然、その後に結果の局面、すなわち「移行先に主体が存在する」という局面が続く可能性を持ち得ない。つまり「〜ヲ出る」は変化動詞句ではないと言える。

「〜ヲ出る」等の［起点］ヲ格句を伴う動詞句が動作動詞句であることは、テストによっても確かめることができる。次に示すように、［起点］ヲ格句を伴う動詞句においては、「一時間」によって結果の局面を取り出すことができない[6]。

(46) *車が一時間スーパーの駐車場を出る
(47) *太郎が一時間友達の家を出る
(48) *戦闘機が一時間敵国を脱出する
(49) *太郎が一時間迷路を抜け出す

また、これらの動詞句はテイル形で「結果継続」の解釈を実現しない。

(50) *車がさっきからずっとスーパーの駐車場を出ている
(51) *太郎がさっきからずっと友達の家を出ている
(52) *戦闘機がさっきからずっと敵国を脱出している
(53) *太郎がさっきからずっと迷路を抜け出している

以上の議論から、[起点] ヲ格句を伴う動詞句に関して次の点が確認される。

(54) [起点] ヲ格句を伴う動詞句は、結果の局面を持たない動詞句（＝動作動詞句）である。

4. <限界点の有無>に基づく分析

本稿が<結果の局面の有無>と<限界点の有無>を異なる分類結果をもたらす基準とみなす立場に立つことはすでに述べた。この4節では<限界点の有無>という観点から、ヲ格句を伴う動詞句のアスペクトを分析する。動詞句の限界性について論じた研究に、北原1999がある。北原1999は、Atelicな動詞句とTelicな動詞句を区別するテストとして「期間Q（30分）」と「期間Qデ（30分で）」を用いたテストを挙げ、「期間Qデと共起する動詞句はTelicな動詞句であり、期間Qと共起する動詞句はAtelicな動詞句である」としている。以下、本稿では北原1999の規定に基づきながら、ヲ格句を伴う移動動詞句について、それがAtelicな動詞句であるかTelicな動詞句であるかを検討する。このうち [経路] ヲ格句を伴う動詞句については、北原1999が詳しく論じているので、これに従うこととする。

4.1. [経路] ヲ格句を伴う動詞句

[経路] ヲ格句を伴う動詞句の限界性について、北原1999は [経路] ヲ格句が特定的な場合と非特定的な場合に分けて論じている。次の(55)はヲ格句が特定的な場合である。

(55) 太郎がその舗道を歩く

(55)の表す事態は、「太郎」が「その舗道」を歩ききらない場合でも成立したといえる。したがって「その舗道を歩く」という動詞句は、Atelicな動詞句であるといえる。(55)は次のように、期間Qと共起可能である。

(56) 太郎がその舗道を30分歩く

しかし一方で(55)はTelicな動詞句と共起するはずの期間Qデとも共起することができる。

(57) 太郎がその舗道を30分で歩く

このようにAtelicな動詞句であるはずの(55)が期間Qデとも共起することについて北原1999は、特定的な[経路]ヲ格句が「歩く」のような非限界動詞と共起すると事態をはかりとる性質を潜在的にもつようになるということを指摘した上で、「(55)は基本的にAtelicな動詞句であるため、期間Qと共起し、また、それらはTelicな概念を潜在的にもっているため、期間Qデと共起し、その概念を顕現する」としている。

次に非特定的な[経路]ヲ格句を伴う動詞句の例をみる。

(58) 太郎が舗道を歩く

(58)は主体が「舗道」全体を歩ききらない場合でも事態が成立したといえる。また(58)は期間Qとは問題なく共起するが、期間Qデとは共起しづらい。

(59) a. 太郎が舗道を30分歩く
b. ??太郎が舗道を30分で歩く

このことから北原1999は、「非特定的な[経路]ヲ格句は(文脈などによって特定的に解釈されない限り)事態をはかりとることができず、したがって非特定的な[経路]ヲ格句を伴う動詞句はAtelicな動詞句であるといえる」と論じている。

以上の北原1999の議論をまとめれば次のようになる。

(60) [経路]ヲ格句を伴う動詞句は基本的にAtelicである。ただし一定の条件(ヲ格句が特定的で、かつ期間Qデが共起する場合)の下ではTelicな事態を表す。

4.2. [通過点]ヲ格句、[起点]ヲ格句を伴う動詞句

北原1999はヲ格句を伴う動詞句の中でも[経路]ヲ格句を伴う動詞句や他動詞句について論じたものであり、[通過点]や[起点]ヲ格句を伴う動詞句には言及していない。以下では本稿の立場から、[通過点]や[起点]ヲ格句を伴う動詞句の限界性を分析する。

まず[通過点]ヲ格句を伴う動詞句について考えてみたい。北原1999は、[経路]ヲ格句を伴う動詞句ではヲ格句の特定性によって動詞句の限界性に違いが生じることを指摘した。これに対し、[通過点]ヲ格句を伴う動詞句の場合は、常にTelicな事態を表すと言えそうである。

(61) 太郎が(その)山を越える
(62) ボールが(隣の家の)屋根を飛び越える

(61) では、「太郎」が「その山」、あるいは「山」という領域の終点を越えるまでは、事態が成立したことにはならない。つまり (61) は Telic な動詞句であるといえる。同様のことが (62) についても当てはまる。

［通過点］ヲ格句を伴う動詞句が Telic であることは、テストでも確認される。次の例が示すように、これらの動詞句は期間Qデとは共起するが、期間Qを挿入すると不自然になる。

(63) a. 太郎が 30 分で（その）山を越える
　　b. *太郎が（その）山を 30 分越える
(64) a. ボールが 3 秒で（隣の家の）屋根を飛び越える
　　b. *ボールが（隣の家の）屋根を 3 秒飛び越える

以上のことから、［通過点］ヲ格句を伴う動詞句は常に Telic な事態を表すと判断される。

次に、［起点］ヲ格句を伴う動詞句について考える。

(65) 太郎が（その）公園を出る
(66) 囚人が（その）刑務所を脱出する

(65) では、「太郎」が「その公園」、あるいは「公園」を離脱しきるまでは事態が成立したことにならない。つまり (65) は Telic な事態を表すといえる。(66) も同様である。

(65)、(66) の表す事態が Telic であることは、テストによっても確認できる。

(67) a. 太郎が 3 分で（その）公園を出る
　　b. *太郎が（その）公園を 3 分出る
(68) a. 囚人が 3 分で（その）刑務所を脱出する
　　b. *囚人が（その）刑務所を 3 分脱出する

(67)、(68) では期間Qデを挿入した a 文が適格に、期間Qを挿入した b 文が不自然になる。したがって、［起点］ヲ格句を伴う動詞句は Telic な動詞句であると判断される。

以上、この 4.2. では次のことを確認した。

(69) ［通過点］ヲ格句や［起点］ヲ格句を伴う動詞句は、Telic な動詞句である。

5. まとめ ーヲ格句を伴う移動動詞句の位置づけー

本稿では＜結果の局面の有無＞(3 節)、及び＜限界点の有無＞(4 節) という二つの基準に基づいてヲ格句を伴う移動動詞句の意味特徴を分析した。これをまとめると、ヲ格

句を伴う移動動詞句は、アスペクト的観点からの動詞句分類において、次のように位置付けられることになる。

(70)

	結果の局面の有無 (変化動詞句か動作動詞句か)	限界点の有無 (Telic か Atelic か)
[経路] ヲ格句を伴う動詞句 例) 舗道を歩く	— (動作動詞句)	— (基本的に Atelic)
[通過点]、[起点]ヲ格句を伴う動詞句 例) 山を越える／公園を出る	— (動作動詞句)	+ (Telic な動詞句)
————	+ (変化動詞句)	+ (Telic な動詞句)

(70) で特に注目されたいのは、[起点] ヲ格句を伴う移動動詞句である。本稿では「出る」等の動詞を [起点] ヲ格句を伴った動詞句レベルで分析し、これらの動詞句は動作動詞句であるという結論を提示した。しかし、これらの動詞句に変化動詞句との共通点が全くないかというと、そうではない。[起点] ヲ格句を伴う移動動詞句は < 結果の局面の有無 > に関しては変化動詞句と対立するが、< 限界点の有無 > に関しては、[+限界点] という、変化動詞句と共通した意味特徴を持つのである。

最後に、本稿の議論が今後どのように応用され得るかという点について述べたい。移動動詞はヲ格句だけでなく、ニ格句やマデ格句、カラ格句とも共起する。しかしこれらの名詞句は、必ずしも同一動詞文中に共起できるわけではない。こうした名詞句相互の共起関係の一部は、< 結果の局面の有無 >、< 限界点の有無 > という素性を用いた動詞句分類に基づくことで、規定可能になると思われる。この点については別稿で詳しく論じたい。

< 注 >

1 ヲ格句の意味役割に関しては、[通過点] と [経路] を分ける立場 (成田 1979、言語学研究会 1983、杉本 1986、1995 等) と、[通過点] と [経路] を特に区別しない立場 (宮島 1972、寺村 1982、岡田 1998 等) がある。本稿は [通過点] と [経路] を区別する立場をとるが、これは [通過点] ヲ格句を伴う動詞句と [経路] ヲ格句を伴う動詞句が、< 限界点の有無 > に関連して文法的に異なるふるまいを見せることを踏まえてのことである。詳しい分析は第 4 節を参照されたい。

なお、先行研究の中にはヲ格句に [対象] といった統一的な意味役割をたてる立場もある (國廣 1967、山田 1981、田中 1997 等)。本稿では移動動詞と共起するヲ格句に [対象] のような意味役割が立てられるかどうかといった議論には踏み込まないが、本稿はヲ格句の意味役割がより抽象的なレベルにおいて統一的にとらえられ得る可能性を否定するものではないことを付け加えておく。

2 ここで言う「移動動詞 (句)」とは、「出る」「越える」「上がる」のような「移動を表す動詞」と「走る」「歩く」のような「移動の様態を表す動詞」とを一括したものである。一般にこれらは、移動自

体に焦点を当てる動詞かどうかという点で区別されている。しかし、どちらもヲ格句をとることができ、また「移動の様態を表す動詞」でもヲ格句をとった場合には必ず移動を含意する。さらに、「移動を表す動詞」のとるヲ格句と「移動の様態を表す動詞」のとるヲ格句が、同一の意味役割を担う場合がある（たとえば「歩く」「走る」のような「移動の様態を表す動詞」と「上がる」のような「移動を表す動詞」は、ともに［経路］ヲ格句をとる）。以上の点から、「移動を表す動詞」と「移動の様態を表す動詞」を一括した上で［起点］、［経路］、［通過点］ヲ格句を伴う動詞句のアスペクトを分析することには十分な意味があると考えられる。

3　動作動詞と変化動詞の違いに関しては、この他、奥田 1978、森山 1988、工藤 1995 等を参照。

4　変化動詞句の表す運動においては、主体が新たな状態を獲得するまでは運動が完成したことにならない。つまり変化動詞句は必ず限界点を有するから、［＋結果の局面、－限界点］という動詞句グループは存在しないことになる。

　なお、従来の研究の中には、動詞レベルの議論において、「変化点＝限界点」と捉える立場がある。こうした立場では、事実上、「限界点を有する動詞は、変化を意味する動詞に限られる」ということになる。これに対し本稿の筆者は、＜結果の局面の有無＞と＜限界点の有無＞は動詞レベルの分類においても完全な対応関係を為しておらず、変化を表さない動詞の中にも限界動詞は存在すると考えている（通過する、たたく、等）。ただし本稿は動詞句レベルの議論を主眼とするため、ここでは動詞レベルの議論には立ち入らない。

5　ただし、森山 1988 が述べているように、変化動詞句であっても永続的（非可逆的）な変化を表す場合には「一時間」によって結果の局面を取り出すことができない（＊一時間死ぬ）。しかし本稿の扱う例文にはこうした永続的変化を表すものは含まれないので、本稿の議論の範囲内ではテストとしての有効性は保たれる。

6　ただし、［起点］ヲ格句を伴う動詞句でも、次のようにヲ格句に「自宅」や「持ち場」のような名詞がくる場合には、「一時間」によって結果の局面を抽出したり、テイル形で「結果継続」を表したりすることが可能である。

　（i）太郎が一時間自宅を出る

　（ii）太郎がさっきからずっと持ち場を抜け出している（結果継続）

これらの現象は、（i）や（ii）が、単に物理的移動を表すだけでなく、「主体が本来いるべきところにいなくなる」という、主体の留守や不在をも含意することと関わっていると思われる。このような留守・不在を含意する例や、「学校を出る（＝卒業する）」のような物理的な移動を表さない例については別稿で論じることとし、本稿では純粋に物理的な移動を表す動詞句に考察対象を限る。

参考文献

岡田　幸彦　1998「現代日本語の空間移動を表す動詞の語彙的意味の性格－移動のどの部分に重点が置かれるかに基づいて－」『日本研究教育年報（1997 年度）』東京外国語大学

奥田　靖雄　1978「アスペクトの研究をめぐって」『教育国語』53、54

奥田　靖雄　1994「講座・教師のための文法 動詞の終止形（その 3）」『教育国語』2·13

影山　太郎　1996『動詞意味論－言語と認知の接点－』くろしお出版

北原　博雄　1998「移動動詞と共起するニ格句とマデ格句－数量表現との共起関係に基づいた語彙意味論的考察－」『国語学』195

北原　博雄　1999「日本語における動詞句の限界性の決定要因－対格名詞句が存在する動詞句のアスペクト論－」中村捷編 『ことばの核と周縁 －日本語と英語の間－』 くろしお出版

工藤真由美　1989「現代日本語のパーフェクトをめぐって」『ことばの科学』3 むぎ書房

工藤真由美　1995『アスペクト・テンス体系とテクストー現代日本語の時間の表現－』ひつじ書房

國廣　哲彌　1967『構造的意味論』三省堂

言語学研究会編 1983『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房

菅井　三実　1999「日本語における空間の対格標示について」『名古屋大学文学部研究論集』45

杉本　　武　1986「格助詞－「が」「を」「に」と文法関係－」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
杉本　　武　1988「「動詞＋テイル」の表すアスペクトについて」『論集ことば』くろしお出版
杉本　　武　1995「移動格の「を」について」『日本語研究』15 東京都立大学
高橋　太郎　1985『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版
田中　茂範　1997「空間表現の意味・機能」『日英語比較選書 6 空間と移動の表現』研究社出版
丹保　健一　1997「「ヲ出る」「カラ出る」の文法－物理的移動の場合－」『語学・文学研究』26 金沢大学
寺村　秀夫　1982『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
成田　徹男　1979「動詞の意味と格－「移動」に関する動詞を中心に－」『人文学報』132 東京都立大学
藤井　　正　1966「『動詞＋テイル』の意味」『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
益岡　隆志・田窪　行則　1987『日本語セルフ・マスターシリーズ 3 格助詞』くろしお出版
松本　　曜　1997「空間移動の言語表現とその拡張」『日英語比較選書 6 空間と移動の表現』研究社出版
三宅　知宏　1996「日本語の移動動詞の対格標示について」『言語研究』110
宮島　達夫　1972『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
森田　良行　1980『基礎日本語 2』角川書店
森山　卓郎　1988『日本語動詞述語文の研究』明治書院
矢澤　真人　1985「情態修飾成分と＜シテイル＞の意味」『日本語学』4-2
山田　　進　1981「機能語の意味の比較」『日英語比較講座第 3 巻　意味と語彙』大修館書店

付記　本稿は国語学会平成 11 年度春季大会（5 月 30 日於同志社大学）における口頭発表の一部に基づくものである。席上、多くの方々から貴重なご意見を頂いた。また稿を成すに当たっては、北原博雄氏より大変有益なコメントを頂いた。お世話になった方々に、感謝申し上げたい。ただし、本稿での不備、誤りは当然筆者に帰せられるものである。

（かわの　やすこ　筑波大学大学院博士課程　文芸・言語研究科　日本語学）